

Title	都市への権利とその彼方：ルフェーブルの再概念化に関するノート
Author	メリフィールド, アンディ / 小谷, 真千代[訳] / 原口, 剛[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 21 巻, p.107-114.
Issue Date	2018
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
Description	City, 15, 3-4, 468-476, 2011.
DOI	10.24544/ocu.20190401-023

Placed on: Osaka City University

都市への権利とその彼方

—ルフェーブルの再概念化に関するノート—

アンディ・メリフィールド*

(小谷 真千代**・原口剛*** 訳)

Andy MERRIFIELD

The Right to the City and Beyond:

Notes on a Lefebvrian Re-Conceptualization

City, 15, 3-4, 468-476, 2011.

晩年のアンリ・ルフェーブルによるエッセイの一つ、「溶解する都市、地球の変貌」^{訳注1}。1989年に『ル・モンド・ディプロマティーク』に掲載されたこのエッセイは、彼の著作のなかでもひとときわ謎めいている。このタイトルが語るのは、ふたつが対であること、ただそれだけだ。そこには、めずらしく悲壮なルフェーブルの顔がのぞいている。彼が愛した伝統的都市の後を追うようにして亡くなる、2年前のことだ。彼は言う。都市は道を踏み外し、行く先を見失って、地球規模の変貌へと向かう…

都市を気ままで陽気なものとして、かつてアポリネールがパリを描いたような叙情とともに描くことなど、もはやだれにも出来はしない。そのことを、ルフェーブルは嘆く。いまや、状況はますます厳しく、重苦しいものになりつつある。そして80代になる『都市への権利』の著者は、どこかこの陰鬱な状況を映し出す。ルフェーブルによれば、都市が成長し、発展し、自らを拡張するほどに、その触手はあらゆる場所へと広がっていく。そして、社会的諸関係はますます悪化し、社交性はばらばらに引き裂かれてしまう。

都市が触手を広げ、かつての非-都市世界を、農村の世界を都市化するほどに、労働市場でも同じく奇妙なことが起こる。ルフェーブルが言うには、労働市場もまた、完全に破壊されていく。仕事の伝統的な形態、まっとうな給料が保障されるような仕事は、「都市形式urban form」があらゆる場所に根を張り、接続をつくり出すにつれて、たちまち煙と消えてしまうようにみえる。仕事を求めて移住する世界中の人びとは、都市に辿り着いたところで、そこにもはや仕事などないこと——少なくとも、生計を立てるだけの賃金を得られるような「フォーマル」な仕事などないことを知らされるだけだ。かつて、人びとは安定した仕事、それも安定した工場の仕事を求

めて都市へやってきた。しかしながら、かつての産業は、いまや倒産しているか、より安価で、搾取できる、使い捨て可能な場所に逃げ去っている。こうして都市はその工業的な基盤を失い、ルフェーブルによれば、結果として「大衆的なpopularly」生産拠点を失うことになった(Lefebvre, 1989, p. 16)。

地球上では毎年何百万もの農民や小作人が、企業的な輸出農業、新自由主義的な世界市場の「合理的な」ダイナミクスによって、自分たちの農村の土地から追い出されている。これらの人びとは、わずかな収入を得る手段のみならず、自給する手段まで失ってしまう。そのため、彼らは見知らぬ土地に転がり込んで、ぎりぎりの状態で、わけが分からないまま生活することになる。不可解なことに、そこはいまや都市とは言いがたく、かといって農村でもない。それら二つの現実性がかすむところに、プッシュアップ効果や略奪の過程の帰結として、新たな現実性が生じている。それは、都市へと人びとを引き寄せては、ジェントリファイされゆく都心から別の人びとを追い出すような現実性であり、昔からの都市の貧民や弱い新参者を空間的周辺peripheryへ、社会的周辺化marginalizationによって隔てられたゾーンへ、グローバルなバンリューへと追いやるような現実性である。世界の都市化とは、ある種、内部の外面化であり、外部の内面化でもある。都市が田舎へと広がるとき、田舎もまた都市へと折り返してくるのだ。

ルフェーブルによれば、こうしたすべてが、いまや「固有の弁証法」を、「中心と周辺が互いに対立する」ようなパラドクスを生じさせた。しかしながら、これらふたつの世界の分断線は、都市-農村、南-北というような、いかなる単純な対立によっても定義されえない。そうではなく、中心と周辺は、資本蓄積そのものに、その「資本の第二次循環」に内在す

* 独立研究者 (independent scholar)
** 神戸大学・院、サンパウロ人文科学研究所
*** 神戸大学

る。この第二次循環の編成を先導するのが、銀行や金融機関、大手不動産業者や仲介業者だ。地代や不動産価格が上昇し、他の産業部門よりもより高い収益が見込めるとなれば、資本は多種多様な不動産投機の「ポートフォリオ」をあさりまわる。階級としての資本の観点からすれば、そこで問題になるのは収益以外のなにものでもない。こうして景観は、純粋な交換価値へと還元され、土地での諸活動は、必ずしも「最善の利用」ではなくとも、「もっとも高度な利用」へと適合させられる。

第二次循環のフローが勢いを増すほどに、利潤を生み出す土地は略奪され、そうではない産業部門や土地は、投資の引揚げによって息の根を止められる。そのとき、中心は自身の周辺を生み出しつつ、その双方を危機に陥れる。これら二つの世界——中心と周辺——は、あらゆる場所で隣り合い、互いをごんじがらめにする。ルフェーヴルの言う「脅威」とは、私たちが「都市」と呼ぶこの形のない怪物が、地球規模の変貌を遂げ、まったく制御不能になることなのだ(Lefebvre, 1989, p. 16)。

都市社会は工業化から生まれる。それは伝統的都市の内的な親密性を打ち砕いた力であり、フリードリヒ・エンゲルスが描くような巨大工業都市を生み出した力でもある。だが、それはいまや自らを滅ぼし、自らの産物によって息の根を止められてしまった。つまり、工業化は自らを否定し、自らの尾に噛みついたのだ。ルフェーヴルが言うには、工業化は量的なものを増大させ、質的なものがある地点にまで押し上げた。そうして、なにか新しいものを、なにか病的なものを、なにか経済的・政治的に必要なものを生み出した。それが、プラネタリー・アーバニゼーションなのである。農村の場所は、漠然とした単位に吸収され消し去られるなかで、ポスト工業的生産と金融投機の不可欠の部分へと組み込まれ、「都市の織り目 urban fabric」へと呑みこまれた。それは、絶えずその境界を押し広げ、かろうじて残された農村生活を蝕んでゆく。こうして、あらゆるもの、あらゆる場所が、剰余価値の増大、資本の蓄積という目的のために貪り尽くされたのである。

市民と都市住民city-dwellerは分断されてきた。ルフェーヴルによれば、近代政治生活の核であった理想や統一性は、おそらく史上はじめて、そして永遠に、引き剥がされ、こじ開けられた。都市住民はいまや悲惨な親密性を抱え生きている。それは社交性なき近接性であり、表象なき現存presenceであり、そして現実に出会うことのない出会いという、悲劇的な親密性だ。都市住民の悲劇とは、あまりに多くを

望んだこと、その望みが次々に打ち砕かれたことの悲劇なのである。

ルフェーヴルのエッセイに通底する口調は、まるで夜明けを求め旅するセリーヌのようだ。しかしながら、彼はホイットマン的な身振りを捨て去ることもできず、新たな民主主義の展望について最後の考えを口にこぼす。彼が言うには、おそらく、市民権の概念を再定義することが必要なのだ。それは都市住民と市民とが、ふたたび包含しあうような概念だという。彼はこう結論づける。実際のところ、かの名高い「叫びと要求」である「都市への権利」は、いまや「まさしく市民権の新しい革命的構想なのである」(Lefebvre, 1989, p. 16)。

* * *

ルフェーヴルはあいかわらず、後半の提案によって、答えと同じだけの問いを呼び起こしている。それはいかなる都市への権利なのか。都市化が地球的なのだとすれば、都市——あるいは都市社会——があらゆる場所に存在するのだとすれば、この都市への権利とは大都市圏への権利なのか、すべての都市集積への権利なのか。それとも、その語は単に特定の近隣への、中心街への、中心性への権利にすぎないのか。さらに、多様な周辺が存在し、同じく中心があらゆる場所に存在するのであれば、都市への権利とは、これらの周辺を占拠し、中心を取り戻す権利を意味するのか。

ルフェーヴルの都市への権利の主たるモチーフは、言うまでもなく、「中心性への権利」である。ルフェーヴルが言うように、それは単に中心を訪れる権利ではない。それはジェントリファイされた古い町を眺めながら、あなたが追い出された町を一日中楽しむというような、思い出をたどる旅ではなく、都市の中心での生活に参加する権利、活動の中心にいる権利なのである。しかしながら、多くの米国アーバニズムにおいて、これ——すなわち中心性への権利——は、多くの都市住民がすでに有していた権利にすぎない。言うまでもなく、これは富と財産を持つ人びとが長く郊外化していた間は、たいして価値のある権利ではなかった。彼らははるか昔、みずから周辺を好んで中心から逃避し、街なかに転がる中心性の断片をふたたび寄せあつめるという役割を、持たざる人びとに任せたのだ。一方で、権力それ自体の中心性は、いまやある種の脱中心化された中心性、多様な結節点からなる優位性、グローバルに広がる多極的な権威と化している。このことが、古風

なルフェーヴルを奇妙な要求に駆り立てるのだろうか(人びとはどこにしようと、もはや自らの中心を、自らの宇宙の中心を創りだすことはないのか。中心性への権利とは、単に地理的なものではなく、内的に生み出されるなにか、実存的ななにかではないのか。中心性への権利という概念を、ひとたびエリート知識人が口にすれば、それは単なる権力への欲望、支配への欲望、高見から見下ろすという欲望、概念的に支配せんとする欲望の反映にすぎないのではないか。おそらくそれは、現実には、多くの「ふつうの」人びとが持つ衝動だとは言えないだろう)。

いまや、こう問うて然るべきだろう。都市への権利について語ることに、つまり、単一の中心を持ち、内側と外側が明確な都市への権利について語ることに、はたして意味があるのだろうか。さらに、都市の領域性がこれほど混沌と広がり、グローバルになっているという状況下で、何らかの「都市urban」をつうじて市民権を定義することが、いかなる政治的な足がかりになるというのか。都市への権利とは、空虚な政治的シニフィエにすぎないのか。都市過程は、かつてなく——ルフェーヴルの時代よりもさらに——金融資本、そして世界金融市場の気まぐれと、固く結びつけられている。グローバルな都市化のブームは、資本の第二次循環へとどまることなく流れ込んでいるように見える。この流れが依拠しているのは、擬制資本とクレジットカードを回転・取引させる新たなメカニズムの創出と、強奪と詐欺を合法化するために規制緩和された新たな装置だ。それらを通じて、資産の剥奪および建造環境への剰余資本の吸収は進行したのである。

ここで重要なのは、デヴィッド・ハーヴェイ(2003)が「略奪による蓄積」と呼ぶ、近年の顕著な傾向だろう。ハーヴェイは、マルクスの「本源的蓄積」論を再読したうえで、二十一世紀の新自由主義的な文脈からその議論を展開させている(Harvey, 2003)。『資本論』においてマルクスは、あらゆる本源的蓄積の歴史は画期であり、資本家階級がみずからを編成(および再-編成)するための梃子であると論じた(Marx, 1976)。その過程はごく単純だ。つまり、「生産者と生産手段との分離」である(Marx, 1976, p. 875)。資本主義の年代記が伝えるように、マルクスの考えによれば、本源的蓄積は多様な形態をとった(Marx, 1976, p. 876)。もっとも、これらの年代記に記されたインクは、まだ乾ききってはいないようだ。

人間の大量が突然暴力的にその生活維持手段から引き離されて無保護なプロレタリアとして労働市場に投げ出される……。農村の生産者すなわち農

民からの土地収奪は、この全過程の基礎をなしている。

しかしながらハーヴェイが明らかにするように、現代における略奪による蓄積は、投機と市場拡大という別の局面を指し示している。つまり、合併や買収による資産剥奪、年金基金の乗っ取り、水道やその他の公共施設のような既有資産の私有化、そしてこれまで公共財であったはずの資産の全般的な略奪だ(Harvey, 2003)。

オスマン男爵はパリ中心部へと侵攻し、古くからの近隣と貧民を攻撃した。都市の中心へと投機する一方で、貧民を周辺へと追いやったのである。こうして建造された都市形式は、不動産マシーンと化し、同時に、分断と支配のための手段と化した。こんにちのネオ・オスマン化もまた、金融・企業・国家の利害を統合し、地球を蝕んでいく過程である。強制的なスラム・クリアランスと取用によって土地を差し押さえ、かつての住民をポスト工業の停滞に喘ぐグローバルな後背地へと追いやっては、その土地を売りに出していく。

そこで、以下のことが問題になる。金融資本が動力源である以上、いまや都市過程はグローバルだ。それゆえに、民主化もグローバルなものでなければならない。しかしながら同時に、ルフェーヴルのような都市への権利の理論家によれば、私たちは、都市領域を切り出す必要がある。そして、都市領域に政治的な特殊性を持たせつつ、反新自由主義の闘争に政治的な優位性を与え、さらにグローバルな市民権にもいっそうの優位性を与えなければならないのだ。だから一方では、都市をグローバルなものとして捉える必要がある。というのも、都市化がグローバルな規模で、トランスナショナルな金融資本に先導されているのだから。しかし他方で、都市がこのグローバルな闘いにおいてなんらかの鍵を握るとすれば、それは語のもっとも広い意味で、もっとも広大な領域のスケールで、都市が捉えられるかぎりのことである。すると、どうしたことだろう。まるで都市の特殊性とは、なんの特殊性ももたないことかのように見える。都市への権利とは、都市にもとづいていながら、市民権を求めるグローバルな闘争でもあると言うのだから。もしかしたら私だけかもしれないが、この論理はトートロジーに陥っているように思われる。私たちは、堂々巡りをしているのではないか。

問題はここにある。どうも私たちは、グローバルな新自由主義における金融資本の支配的役割を(正しく)認識するやいなや、ただちに「都市的なもの」

がこのプロジェクトをめぐる主張にとって最重要であるはずだという、いささかあいまいな政治的な訴えを口にしてしまう。しかし、こうしたある主張から別の主張への移行は、まったく整合性を欠いており、じっさいに政治的・理論的な不合理を引き起こす。事実、私たちが「都市」を政治闘争にとって固有の領域であると認めたとしても、こう戸惑うことになるだろう。都市への権利とは、じっさいのところ何なのか。

それは、パリ・コミュニケーションに似たなにかなのだろうか。パリ・コミュニケーションとは、歓喜に沸く民衆が街の中心部へと躍り出た壮大な祝祭であり、そこには中心があった。彼らはそこを占拠して、一時的ではあったが、家賃を廃止させた。仮にそうだとするならば、マルクスが取り組んだ問題をどう考えるのか。いったいどのように、中央銀行や、あらゆる資本や商品のフローに立ち向かえばいいのだろうか。さらに、いったいなぜ「都市」がこうした取引や交易を必然的に阻止することになるのか。民衆が大企業と金融機関のたちならぶ中心街を再・領有re-appropriateする、あるいはウォールストリートに占拠するとして、このことがいったいどのように「システム」を真に突き崩すのだろうか（都市の解体という凄まじく壮観な行為——世界貿易センターの倒壊——も、世界の商取引をたった一日止めたにすぎないというのに¹⁾。

そのうえ、20世紀の革命の歴史を見てみれば、都市というアーリーナの支配をめぐる闘争は、たいていの場合革命の添え物に過ぎなかったことは明らかだ。その時点ですでに、社会運動が組織され、同盟が結ばれていたのだから。都市の支配を勝ち取ることは、勝利の絶頂を、冬宮への突撃を、ベルリンの壁の崩壊を、粘りよく闘われた陣地線の最終決戦を、社会運動における最後の歓喜の雄叫びを告げることなのである。また、多くの場合、近代における革命の活力は、都市にあったのではなかった。それは、田舎から都市の路上へと流れ込んだのである²⁾。レジス・ドゥブレが『革命の中の革命』で述べたように、都市とは「空っぽの頭」なのであり、多くは無力で、略奪による蓄積の痛みを受ける人びとの窮状に耳を傾けたりしない。反乱の「武装した拳」となるのは、農村という後背地であり、ジャングルの奥地であり、見捨てられたパンリュウなのだ。ドゥブレによれば、「都市とは……ゲリラ運動についての象徴であり、首都におけるクレーターの条件を整えることがその目的であった」（Debray, 1967, p. 77, 強調は引用者）。毛沢東、チェ・ゲバラ、カストロ、（ニカラグアの）オルデガらは皆このことを知っていた

し、間違いなくマルコス副司令官に賛同するだろう。都市は、大衆的な要素をラディカル化させるよりもむしろ、無力化する（cf. Debray, 1967, pp. 76-77）。

このような観点から言えば、都市は、ルフェーヴルが言うような弁証法的な作品というよりも、サルトルのいう実践的惰性態であり、過去の行為の牢獄である。能動の実践を抑制し蝕むような受動的総体性であり、動かぬ煉瓦とモルタルからなる形なき形式である。サルトルによれば、実践的惰性態は能動的活動に敵対する。なぜならその反-弁証法的が告げるのは、死んだ労働が生きた労働を支配し、実践が客観的な疎外形式へ、つまり都市そのものへと収束させられるということなのだから（Sartre, 1976）。ルフェーヴルは『メタ哲学』において、サルトルの言う実践的惰性態としての都市という定式化を批判しているものの（Lefebvre, 1965, p. 85）、それでもなお、この概念はこんにち都市の住民が相対的に服従させられていることを説明しうる。彼らの多くはもともと農民であり、農村にルーツを持つ。それはこれまで存在することのなかった、かつての百万倍にもなる集団である。農村から出てすぐ受動的な放浪者となり、失業者、半失業者、多重雇用の接客業従事者となる、ダイナミックな人びとのフローなのだ。彼らは貧民街へと閉じ込められ、過去から切り離されながら、未来からも締め出されている。「モダンな」都市生活に捕捉されることもない。そのかわりに、彼らは日々食うために身を粉にして、ただ死んでゆく。

このような都市世界と農村世界の衝突、その結果として生じる複雑な混交、縫い合った忠誠心と統合失調症。これらが、ジョン・バージャーの小説『ライラックとフラッグ』の基調をなすものだった。彼の「老いた妻が語る都市の物語」は、こうしたプロブレマティックをフィクションとして描くのだが、そこではいくばかの真実も明かされる（Burger, 1990）。バージャーの語り部となるのは、年老いた農民だ。彼女は皆が出て行ってしまった村に一人残った女性であり、都市に不信感を抱いている。彼女にとって、いよいよとなれば、そこには二つのタイプの人間しかいない。農民と、農民を食い物にする人間である。彼女が語る、ズーザとスークス（またの名をライラックとフラッグ）という人物の物語において、二人の恋人たちは、トロイという幽霊のようなメトロポリスで、不安定な道を渡ろうとしている。そこは、高速道路とコンクリートブロック、貨幣価値とペテン、広大な自由と横暴な投獄でできた、典型的なポストモダン都市だ。

スークスは、都市の周辺部に建つ無味乾燥な高層ビルの十四階に、両親と住んでいる。スークスのパパ、クレメントは、十代の頃に田舎から出て以来ずっと、牡蠣の殻を開ける仕事をしてきた。ある日クレメントは、不慮の事故でひどい火傷を負い、病院で息をひきとった。彼は息子が仕事にありつけるかどうかをいつも心配していた。死に際のパパに、スークスは言う。「ここに仕事なんかないよ……僕たちがつくり出さなにかざり。仕事なんかない。仕事なんかないんだ」。するとクレメントは、息子にこう答えた。「村へ帰りなさい。私はいつだってそうしたかった……死ぬ前に山を見なさい」(Berger, 1990, p. 47)。彼によれば、病室に居る患者の半分は、故郷の村か母親のことを思い出している。それが彼らの考えることのすべてなのだ。だがもちろん、スークスの世代はそんな村を知らないし、帰る場所などどこにもない。彼らは、見知らぬ都市でそれを見つけることなどできない。彼らの世代が生まれた都市においてすら、そうなのだ。スークスの世代は、戻ること、進むこともできない。過去にも未来にも、郷愁を持つことはないのだ。それなのに彼らは、親世代がそうしたようには、このどうしようもない状況を受け入れてしまうことはできない。彼らの期待は、親たちとは違う。しかしながら、彼らの前に道が開けることはない。

バージャーの『ライラックとフラッグ』は、ある世代の人びとについて、都市住民について掘り下げた作品だといえる。彼らにとって「都市への権利」はなんの役にも立ちほしくない——実用的な概念としても、政治的プログラムとしても。日常生活のなかでなんらかの実存的な意味をもつには、それはあまりに抽象的すぎる。こう言い換えてもいい。都市への権利が政治化しているものごとは、あまりに広大であると同時に、あまりにも狭い。集合的な反撃を呼び覚まし、スークスや彼らの世代を団結させるには、一体となった集団として集合的に行為するには、あまりにも限定的で、不完全なのだ。それは、空虚なシニフィエでしかない。

都市への権利は、端的に言って、分節化が求められてくるような、まっとうな意味での権利ではない。それは、あまりに広大である。なぜなら都市というスケールは、路上のレベルで生きる大多数の人びとの手に届くものではないからだ。そして同時に、それはあまりにも狭い。なぜなら人びとが抗議の声をあげるとき、彼らが群衆となって路上に押し寄せるとき、彼らの実存的欲望は、たいてい都市というスケールの彼方へと向かっているからだ。また彼らは、共

有的で集合的な人間性を、純粋な民主主義を切望しているからだ。バージャーが描くスークスは、出番を待ちながら息を潜める潜在的な政治的主体だが、おそらく、希望に反することすら望んでいる。しかしながら、かれは身近ななにかを、些細ななにか——触れること、においを嗅ぐこと、感じることでできるなにか——を待ち望み、かつ、生活よりもずっと広大で、世界的であり歴史的でもあるなにかを、待ち望んでいるのだ。つまり彼が待ち望んでいるのは、両方の領域をいちどに結合できるような実践であり、生きられたものと歴史的なものを、(『メタ哲学』でのルフェーヴルの表現を借りれば)「いびつなまま両立させられた」(Lefebvre, 1965, p. 77) 二つの実践の側面を、一致させる実践である。

* * *

都市への権利がうまく機能しないとすれば、いったいどうすればよいのか。ルフェーヴルの政治思想には、より豊かで、こんにちのラディカルな政治により大きな力を与えるような引き出しが、ほかにあるのではないだろうか。おそらく出会いencounterという概念は、世界の都市化を考えるための、生きられたものと世界-歴史的なものとの弁証法を架橋するための、別の見方を与えてくれる。思い出してみたい。ルフェーヴルの、都市とは最高の出会いの場であるという言葉。それは、しばしば機会の出会いであり、とりわけ政治的な機会の出会いの場である。しかし、なぜそれをことさらに区別する必要があるのだろうか (Lefebvre, 1974)。いっそのこと出会いの力を、ラディカルな政治の要素として、社会の編み目の全体へと、可能なる戦闘的実践のあらゆる領域へと広がる要素として、捉えてはどうだろうか。つまるところ「出会い」という概念は、人びとが人間存在としてどのように手を取りあうのか、なぜ集団性が生み出され、いかにして連帯が芽生え、具体化し、形作られるのかについての物語なのだ。

出会いの政治もまた、生きられたものと歴史的なものを、個人的な生活と集団が一体となる動態とのあいだを仲介しうるなにかである。それは、無力感に苛まれているように見える集団の惰性態を乗り越えうる。抵抗する諸個人がたがいに出会うとき、(スピノザの理解によれば) コナトゥスが民主的に存在したいという欲望をかき立てる。それゆえに、人びとがみずからの行為の集団的力を表現するとき、そこにひとつの社会運動が、それも歴史的な意義をもつ社会運動が生まれつつある。共通の概念は、人び

とを結びつけ、その身体と精神とを結びつける。いまや現実的かつ仮想的な空間で、意識と無意識とがぼんやりとしか区別できない領域で、多様な人びとが交差しては混じり合っている。そこではもはや、なにが都市でなにが田舎なのか、なにが都市的でなにがグローバルなのかを差異化することには、なんの理論的・政治的な意義もない。

生き生きとした出会いの政治は、受動的な情動を能動的な情動へと変換する。それは、次のことを認識させるものでなければならないし、また認識させるだろう。すなわち、「ただひとつの本質」が私たちのすべて、とりわけこれまで侮辱され搾取されてきた世界じゅうの人びとに通じるものであることを。彼らは、いつでも直接的にというわけではないが、直感的に出会うだろうし、出会うことができる。書かれることもなければ言明されることもない共通の合意をつうじて、連帯をつうじて、彼らは出会うのだ。これはいままでもそうであったし、これからも続いてゆくのだろう。とりわけ、グローバルなコミュニケーションがすべての人びとを統合しつつも分断する未来において。じっさい、おたがいを見つけ、観念的に、感情的に、そしておそらくは経験的に触れあうやいなや、また私たちが人間存在としての自分たちに出会うやいなや、私たちは、私たちの生についてのある種の概念を組み立てはじめる。こうして私たちは、一見すると単なる個別的な経験にしかみえないもの——漠然とした、生きられた経験——を普遍化させ、より一貫したものへと練り上げるのだ。なおかつ、個別的にみえるものはじつのところ、一般的なものである。私たちだけが抱えているようにみえる苦境は、現実には多くの人びとが抱える苦境であり、さまざまな多数の人びとの苦境である。

出会いの政治は、潜在的には、より大きな力を与えるものとなりうる。なぜなら、政治的にも地理的にも包摂的だからだ。私たちの権利、人類の権利、都市への権利、人権の要求は、いったん忘れてしまおう。出会いの政治は権利とはなんの関係もないし、なんの要求も語りはしない。それは、話すことすらしない。むしろ出会いの政治は、ただ行動する。ただ行為し、確認し、手にし、取り返していくのだ。出会いの政治は、なにかしらの抽象的な要求も、懇願もしない。そこからなにかの権利が導かれることはないだろうし、なにか権利が授与されることを望まない。なぜなら出会いの政治は、世に通用するいかなるルールも認めず、権力を握る者の承認を求める気もないからだ。それでももし言うべきことがあるとするなら、出会いの政治は、その集団がたった

いま集合的に発明したばかりの言語を話す、ということだ。

人びとがたがいに会おうとき、彼らはしばしば、喜びの瞬間のうちに根つき、凝固した親しみaffinityゆえに、そのように出会う。そうした連鎖しやすい要素だけが、なにかしらつながっていく。言うまでもなく、心の底にある感情、秘密組織、政治工作、転覆、増大する不満といったものは、ふだん社会の深部でうごめいている。しかしながら、それらが炸裂する瞬間、それらがほんとうに噴出する、大変な事態が生じる瞬間。それは、必ずや不意にやってくる。

ここで親しみは、結束を固める役割を果たす。それは瞬間的かもしれない。だが、それで十分である。その瞬間は、簡単に消えることなく出会いを継続させ、境界と障壁を越えて人びとを結束させる。別の現実を望み、それを発明し、それを呼び覚まそうとするなかで、近くに、あるいは遠くにいるかもしれない仲間たちの存在に、人びとは気づく。そしてその出会いのなかで、彼らは共通の希望を実現するため、共に闘うのだ。身体と精神を空間へと根づかせることで、人びとは集団としてのコモンリティcommonalityを生み出してゆく。路上にはアクティヴィズムの「強い絆」をつうじたフェイス・トゥ・フェイスの集合がある一方、ヴァーチャルな「弱い絆」のアソシエーションをつうじた、オンラインの集合もある。この2つがたがいを強化することで、新たな概念の次元が生み出される。すなわち、速度という概念だ。それは、群衆が集合する速度であり、デモが起こる速度であり、今日の誰かが別の誰かと出会う速度である。

近年のチュニジアとエジプトの路上デモについて考えてみよう。興味深いことのひとつは、チュニスとカイロという首都の路上で生じたにもかかわらず、じっさいの争点は都市ではなかった、という点だ。むしろ争点であったのは民主主義であり、私たちにとってなじみのあるアーバンイズムよりも、ずっと単純で、もっと広大な、なにかであった。多くのアクティヴィズムや組織化は、Facebookやツイッターを用いることで、脱領域的に展開した。あるいは、ポスト都市的であったといってもいい。それは、本質的に指導者をもたぬ、ラディカルな瞬間＝モメントの連続だったのである。ここでこの言葉は、ルフェーブルが述べるモメントという概念に呼応し、重なり合う。出会いのポリティクスにおいて、(ルフェーブルの言葉をかりれば)「モメントの星座」は、銀河的な様相をみせる。ここでそれぞれのモメント

は、将来の現存を含み、ある秩序の終わりの始まりを、そして別の秩序の芽生えを含んでいる。ルフェーヴルによれば、モメントは諸々の直線のあいだに、特定の文脈に潜在する。このモメントは、直線的な時間の流れを打ち崩し、まだみぬ別の集結地点をめざして、差異に満ちた偶然的な方向へと導いていく。モメントとは、捉えられ、発明されるのを待っている政治的な機会なのだ。それは隠喩的でありながら実践的で、触れることができるが触れることができない。強烈でありながら、はかなくもある。いふなればそれは、純粋な感情や直接性に存し、そこにいること、そこにしかいないことの経験に存する、熱狂的な感覚なのである。ちょうど祝祭や革命のモメントがそうであるように。

疎外とは不在を反映する概念であるのと同じく、生気のない死んだモメントは、意味を持った動態的な内容を剥ぎとられている。これに対しルフェーヴルがいうモメントは、現存を意味する。ルフェーヴルが「現存の本質の様相」と呼ぶように、それは、充満、つながり、志を同じくする人びとの社会的なむすびつきなのだ (Lefebvre, 2002, p. 345)。モメントには、ルフェーヴルが思い描いていたように、機会につきものの危険なゲームだけでなく、自由という概念が含まれている。そこには、遊びと闘争のモメント、休養と詩のモメントがあり、それらはつねに、「固有のある持続性」をもっている。ルフェーヴルによれば、モメントは「持続しようとする」が、「(長い間) 持続することはできない。かかる内的矛盾はモメントに強度を与えるが、その強度は、それが充満して、終結の不可避性が現われる時には、その激発にまで押しやられる」(Lefebvre, 2002, p. 345)。モメントにとって、

失敗の瞬間は……最大の重要性を持っている。それはドラマを、すなわち、日常的なものの出現、あるいは、出現する間もない再転落、戯画もしくは悲劇、成功した祭もしくは疑わしい儀式、といったものを、状況づける。(Lefebvre, 2002, p. 351)

問題はここにある。あるモメントが別のモメントを生み出し、それらが路上で衝突するとき、出会いのポリティクスが炸裂する。しかしながら、どうやってこの出会いの強度を持続していけばいいのか。いかにしてそれを、継続的な政治革命や、変革の真正的な政治と調和させていくのか。この日常生活のモメント——この自然発生的で、生きられたモメント——が、世界的かつ歴史的な意義の変容であると、

なにをもって言いうるのか。

この問いに対し、踏み込んだ答えを示すことは、誰にもできないだろう。あらかじめ成功を約束するような定式など、存在しないのだ。ただ言えるのは、あらゆる出会いのモメントが、ある種の主体なきプロセスと化し、またたくまに広がっていくということだ。それは、自然発生的なオンラインやオフラインの秩序化によって、群衆がすぐさま身体のアサンプチュアと化すようなモメントである。ここで参加者たちは、行為すると同時に行為に応答し、親しみを覚えると同時に親しみを受ける。人間の織りなすような万華鏡は、喜びと祝祭、暴力と野蛮、優しさと無視といったものを構造化させ、明確にしていく。参加者たちは、情熱を共有し希望を確認しあう単一の存在へと凝固するだけでなく、みずからの歴史的空間をつくり出す力へと凝固するのである。

いかなる出会いの政治も、人びとが行為する空間の中にあるのではない。そうではなく、行為することによって、人びとが空間になるのだ。そこに情景的なものはなにひとつなく、それが都市であることは必ずしも必要ではない。そこにはなんの虚飾もなく、余剰もない。疎外のようなものも、ない。すべての行為、すべての人間のつながり、それぞれの身体は、もしそれらが真につながらば、文字どおり空間を満たすのだ。行為が息づき、参加者たち自身の身体が、情景の大部分を構成していく。それらの身体が、空間の内容となると同時に、空間の形式となる。そのかぎりでは、出会いの政治はつねに、どこかでの出会い、つまり空間的な出会いの場所となる。それはつねに、人間の結合と連帯の秘められたランデブーであり、仮想的で、感情的で、物質的なトポグラフィとなる。なにかがそこに根を下ろし、行き詰まりや停滞の状態へと介入していく。

結局のところこれが、ルフェーヴルの都市への権利に手を加え、再構成するための、最良の方法であるように思われる。つまり、都市への権利を乗り越え、突き抜けて、その彼方へと進み、それを否定することである。ある概念がかみ合わず、うまく作用しないなら、どうすべきか。私たちがなすべきことなら、すでにルフェーヴルが示してくれている。彼が言うように、そんな概念は捨て去って、敵にくれてやればいいのだ。じっさい、ルフェーヴルにとってある概念の政治的な有用性とは、現実と一致することで確かめられるのではなく、現実を挑むのを可能にすることによってこそ、確かめられる。あるいは、別の現実を、仮想の現実をかいま見せることによって、確かめられる。そのような現実は、ここで、

どこかで、私たちの中で、ただ生まれ出るのを待っているのだろう。出会いの政治は、私たちに他者との出会いだけでなく、自分たち自身との具体的な出会いを否応なしにもたらす。したがってそれは、私たちを取り巻くすべてや、私たちがすでに持っているなにかを求めるような、安直で抽象的な要求とはなりえないのである。

注

- 1) 2010年3月に国連が主催したりオ・デ・ジャネイロでの世界都市フォーラムにおいて、国連と世界銀行は、グローバルな都市貧困の罨へのとりくみとして、都市への権利をかけた。同時に、フォーラム会場の向かい側では、人びとによってそのオルタナティブが開催されていた。そこでアクティビストたちは、草の根からの理想を支配階級がかすめとっていると訴えた。これら両方のイベントに参加したのがデヴッド・ハーヴェイである。彼が世界都市フォーラムで「都市への権利という概念は資本主義システムと相容れない」と断言したとき、会場のパネリストたちは居心地わるげに静まりかえった (<http://usf2010.wordpress.com/>)。おそらく、ハーヴェイのコメントが主流になるであろうことは当然として、より興味深いのは、これが左派にとってなにを意味するかという点だ。はたして都市への権利は、ポスト資本主義の現実においてのみ発現しうる権利なのだろうか。
- 2) ルフェーヴル自身、このことをよく理解していた。思い出してみたい、彼のラディカルな都市政治についての思想の源泉が、日常生活、とりわけ季節の祝祭と喧騒、ラブレー流の饗宴 (*ripaille*) にあったことを。ルフェーヴル自身の気質といえば、都市と農村の奇妙な混合だった。彼は『総和と余剰』で自らの姿かたちについて、面長で、痩せこけた、都市の顔——ドン・キホーテの頭をもちながら、ずんぐりした身体はさながらサンチョ・パンサのような農民のそれ (*trapu*) だと描写している (Lefebvre, 1959, p.242)。ルフェーヴルはこのいびつな組み合わせを気に入っていた。そして彼は、もうどちらも取り返しがつかないことを知りながら、田舎の破壊と嘆くのと同じくらい、伝統的な都市の破壊を嘆いたのである。

訳注

- 訳注1 このエッセイは、本誌に掲載されているルフェーヴル「地球の変貌」と同一の内容である。

文献

- Berger, J. (1990) *Lilac and Flag: An Old Wives' Tale of the City*. London: Grants Books.
- Debray, R. (1967) *Revolution in the Revolution? Armed Struggle and Political Struggle in Latin America*. New York: Grove Press.
- Harvey, D. (2003) *The New Imperialism*. New York: Oxford University Press. [ハーヴェイ (本橋哲也訳) 『ニュー・インベリアリズム』青木書店, 2005年].
- Lefebvre, H. (1959) *La somme et le reste – tome I*. Paris. La nef de Paris. [ルフェーヴル (白井健三郎・森本和夫訳) 『哲学の危機 (総和と余剰 第1部)』現代思潮社, 1970].
- Lefebvre, H. (1965) *Métaphilosophie*. Paris. Éditions de minuit.
- Lefebvre, H. (1975) *Le droit à la ville*. Paris: Éditions de seuil. [ルフェーヴル (森本和夫訳) 『都市への権利』筑摩書房, 1969].
- Lefebvre, H. (1989) 'Quand la ville se perd dans une métamorphose planétaire', *Le monde diplomatique*, mai, p. 16.
- Lefebvre, H. (2002) *Critique of Everyday Life – Volume Two*. London: Verso. [ルフェーヴル (奥山秀美訳) 『日常生活批判 2』現代思潮社, 1970].
- Marx, K. (1976) *Capital – Volume One*. Harmondsworth: Penguin. [カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス編 (大内兵衛・細谷嘉六監訳) 『資本論 第1巻』『マルクス=エンゲルス全集』第23巻, 大月書店, 1965年].
- Sartre, J. P. (1976) *Critique of Dialectical Reason – Volume One*. London: Verso. [サルトル (竹内芳郎・平井啓之・矢内原伊作・森本和夫・足立和浩訳) 『弁証法的理性批判 第1巻 実践的総体の理論』『サルトル全集』第26-28巻, 1962-1973年].